

報告

ささやかなアフガン難民支援（続編）

特定非営利活動法人 警備人材育成センター理事長 松浦晃一郎

同理事 篠塚隆

はじめに

2021年8月のタリバーン勢力によるカブール制圧以来3年近くが経ち、現在、日本はカブールに大使館を維持し、国際社会と連携しながら、アフガニスタンの平和と安定のための努力を継続していくことを方針としていますが、その間にも、多くのアフガニスタンの方々が祖国を離れて世界中に移って行かれ、その一部は日本に避難されることとなりました。2022年末時点で「特定活動」を有して日本国内に滞在しているアフガニスタン出身者は329人、2022年には147人、2023年には237人のアフガニスタン出身の方々が難民として認定されました（その大半は日本大使館の現地職員、JICA事務所職員、プロジェクト関係者として勤務された方およびそのご家族）が、日本に滞在されていた方の中には祖国に戻られた方がおられる一方、一旦帰国後再び日本に戻られた方もおられます。こうした難民認定人数は日本としては画期的であり、外務省をはじめ関係者の尽力によるものですが、認定後もアフガン難民の方々の日本での生活は決して容易なものではありません。

特定非営利活動法人警備人材育成センターは、自主防犯活動をより活発にし、地域の安全、安心を支えるための地域の人材育成を目的として国家公安委員会の登録講習機関として活動しているNPO法人で、2013年に発足し、10年を機にささやかながらアフガン難民支援を継続的に行っていくことといたしました。既に2023年10月と昨2024年3月に2回の生活支援金贈呈式を行っています（これに関しては本ホームページ2024年6月号に寄稿させていただきました）が、去る2024年9月にJICAのご支援を得て三回目の贈呈式を行いましたので、その模様についてご紹介したいと思います。

第三回贈呈式

アフガン難民支援を行っている特定非営利活動法人イーグル・アフガン復興協会に対する今回の贈呈式は、JICAのご好意により、JICA市ヶ谷センターの大会議室で昨2024年9月27日の午後に行われました。

冒頭松浦からの挨拶で、警備人材育成センターの活動紹介後、アフガニスタンとの縁、外務省経済協力局勤務時の対アフガニスタン援助の推進、2001年のユネスコ事務局長として

のアフガニスタン初訪問の際に故緒方貞子先生（当時国連難民高等弁務官、後に JICA 理事長）とカブール空港でお会いしたエピソードなどを紹介し、我が国におけるアフガン難民支援の意義と必要性を強調しました。続いて、来賓として参加された米谷光司アジア福祉財団難民事業本部（以下 RHQ）本部長（元外務省アフリカ部長）、嘉治美佐子国連 UNHCR 協会理事（元在クロアチア大使）、そして JICA の原昌平理事（南アジア担当）から、それぞれの挨拶の中で激励の言葉をいただきました。

米谷本部長は、RHQ が政府からの委託事業として行っている日本に定住される難民の方々への支援（難民認定を受けられた方々への日本語教育と日本での生活ガイダンスを組み合わせた 6 か月間の定住支援プログラムおよびフォローアップ）について説明されるとともに、日本とアフガニスタンとの長年にわたる友好関係や両国関係のために貢献されたアフガン難民の方々の日本での生活に力添えができてうれしいと述べられました。

嘉治理事は、緒方国連難民高等弁務官の特別顧問として勤務された経験に触れられつつ緒方高等弁務官がいかにアフガニスタンのことを心にかけておられたかを語られ、自分の中には緒方レガシーが流れているので、自分にできる形で難民の方々のサポートをさせていただきたいと述べられました。

原理事は、2021 年以來のアフガニスタンの状況に心を痛めており、アフガン難民の方々のご苦勞を思うと胸が痛くなる、難民の方々が日本で活躍されるに当たっては得意な英語を活かしつつ日本語も学ばれ、両方を活かされることでポテンシャルが開かれるのではないかと述べられました。

挨拶に続き、松浦からイーグル・アフガン復興協会の江藤セデカ理事長に 2024 年 4 月から 9 月まで計 60 万円分の支援金の目録をお渡ししました。

難民の方々の声

引き続き、江藤理事長から、警備人材育成センターの支援に心から感謝している、贈呈いただいた資金は引き続き活用していきたい旨のお礼を述べられ、また、イーグル・アフガン復興協会の関根正男理事からは、2023 年来警備人材育成センターから提供いただいている支援金はイーグル・アフガン明德カレッジ（千葉明德学園の空き教室を使ったアフガン難民女性向けの日本語教室）の運営に用いられており、3 つのレベルの授業が行われるようになった、イーグル・アフガン復興協会ですこうしたことをやろうという機運が高まり、明德学園に教室を提供いただく話が進んでいるタイミングで資金援助をいただけたことは大変ありがたかった旨の説明がありました。

この後、当日出席された難民代表の方々から日本語または英語でそれぞれ発言がありました。

一元 JICA の研修生で、日本の大学において教師としての訓練を受けられた N さん（女性）

は、母国で一時教鞭を取っておられました。現在は難民として日本で生活されていて、祖国への思いと感謝の気持ちを述べられました。日本生まれで日本育ちのお嬢さんの L さんとともにイーグル・アフガン明德カレッジで手伝っておられるとのことでした。なお、L さんは来年松浦とも縁のある私立大学に進学予定ですが、奨学金だけでは学費を賄いきれないのが悩みであるとのことでした。

一元医師の R さん（女性）は政府軍関係の病院で勤務されていたこともあり、日本に難民としてやって来られました。アフガン難民の声を代弁したいとして、政府が難民に対してまず徹底的に語学教育を行い、さらにその後の就学や就職の世話もするといった欧州諸国の手厚い施策の例を挙げて、日本でも難民がその知見や専門知識を活かせる職に就けるよう政府の支援をよろしくお願ひしたいと述べられました。R さんは民間企業で働きつつ家族の面倒を見られ、さらに夜間は RHQ の日本語のオンライン授業も受講されていますが、体力的に大変とのことでした。

一去る 4 月の第二回贈呈式にも出席された元日本大使館員の夫人である M さん（女性）は日本語を勉強して、日本語能力試験 N4 に合格されたとのこと、さらに向上したいとの抱負を述べられました。一緒に来られた 2 歳の息子さんもますます元気に育っておられました。

一元 JICA の研修生として日本の大学院で都市工学を学ばれ、ピースプロジェクトの一環としてカブール市役所の都市計画部門で勤務されていた F さん（男性）は現在難民認定申請中ですが、これまでの日本の支援に感謝し、がんばりたいと述べておられました。（因みに F さんは後日、民間企業への就職が決まられたとのこと。）

なお、贈呈式に先立ち、別室で、JICA の委託による RHQ の日本語講座昼間コースの受講を終了された元 JICA 職員 E さんの二人のお子さんと原 JICA 理事との懇談が行われ、篠塚も同席させていただきました。E さんご一家は来日後一旦帰国されましたが、さらに再来日されました。支援団体のシェルターで一時生活されるなどの苦勞をされたというお話を聞くのは胸に迫るものがありましたが、500 時間を超える課程を終えられた二人のお子さんの顔は自信と達成感に満ちているように見えました。（お父さんの E さんも夜間に RHQ のオンライン授業を受講してがんばっておられるとの由です。）

結び

既に 2 度を経た資金贈呈式の 3 度目を今回行えた次第ですが、当警備人材育成センターのささやかな支援がアフガン難民女性の方々の日本語学習という形で役に立っているのはありがたいことです。11 月には、日本語習得に精進されていた JICA 事務所元職員の男性が、当センターの紹介を通じ、警備会社に就職が決まるといううれしいこともありました。ただ、イーグル・アフガン明德カレッジをはじめとして関係者のご努力により善意の輪は広

がっていますが、言語・文化の異なる日本での生活がまだまだ大変なことに変わりはありません。難民認定において重要なのはとりわけその後のことですが、特にアフガニスタンの場合のように、古くからの親日国で日本のために働かれた方々が難民とされているケースでは、そうした方々を支援するのが日本という国家の責務であり、品格を示すことになるのではないのでしょうか。当センターとしては、今後とも特性を活かした職探しを含め可能な限りアフガン難民の方々を支援する活動を続けていきたいと考えており、こうした支援が各方面にさらに広がっていくよう心から祈念しております。

JICA 市ヶ谷センターを辞去する時、1階ロビーに飾られている緒方貞子先生の等身大のお写真が、穏やかに微笑まれながら「しっかりおやりなさい」と静かに励ましてくださっているように見えました。



江藤セデカ理事長への目録贈呈



イーグル・アフガン復興協会と難民代表の方々



出席者一同による記念撮影

(写真提供：警備新報)

著者略歴

松浦晃一郎

第8代ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）事務局長

1937年生まれ。山口県出身。東京大学法学部を経て、外務省入省。米国ハヴァフォード大学経済学部卒。経済協力局長、北米局長、外務審議官（先進国サミットのシェルパ兼任）を経て駐仏大使、世界遺産委員会議長、アジア初のユネスコ事務局長（第8代）を務める。在任中は組織改革を断行し、米国の加盟復帰実現や、無形文化遺産保護条約の策定など多くの業績を残している。帰国後、立命館大学学術博士号を取得。現在はアフリカ協会会長、日仏会館名誉理事長、パリ日本文化会館運営審議会共同議長、群馬草津国際音楽協会代表理事、関西大学客員教授、株式会社パソナグループ特別顧問等を兼務。『世界遺産 ユネスコ事務局長は訴える』、『私の履歴書-アジアから初のユネスコ事務局長』などの他、英語および仏語による著書多数。

篠塚隆

1956年生まれ。兵庫県出身。東京大学法学部を経て、外務省入省。フランス国立行政学院（ENA）留学。内閣官房内閣参事官、宮内庁式部副長等を経て、在アトランタ総領事（米国）、駐モロッコ大使を務める。現在はアフリカ協会特別研究員、日本・モロッコ協会副会長、ルネサンス・フランセーズ日本代表部名誉顧問等を兼務。著書（共著）『英国王室と日本人』。